

ハイデガーにおける「歴史性」の問題の再検討¹

廣田 智子（山口県立大学）

はじめに

ハイデガーは主著『存在と時間』（1927年）に端的に見られるように、「自らに固有なもの」や「歴史性」を重視する哲学者である。1936年から38年の『哲学への寄与論稿』においては、「存在の歴史（Seinsgeschichte）」の構想のもとに、「別の原初への移行

（Übergang zum anderen Anfang）」（GA65,4）を論じる²。ハイデガーは西洋の存在の歴史を「形而上学の歴史」と看做し、存在者について問う「主導的問い（Leitfrage）」に規定されてきたと捉える（GA65,6）。これに対し、「存在の問い」、より正確には「真存在（Seyn）の真理」への問いは「根本の問い（Grundfrage）」と呼ばれる。ハイデガーは根本の問いを遂行することによって、「第一の原初」から「別の原初への移行」を試みる。

一般に哲学や倫理学の領域において、歴史的に規定された人間存在が共に生きるあり方をめぐって、歴史性を重視する立場とそれを超越しようとする立場が考えられる。「原初」にこだわるハイデガーは無論、前者であるが、こうした立場は、所与の歴史的共同体の外部の声を排除し、自己絶対化の危険を有すると目されがちである。本稿では主に『哲学への寄与』における「別の原初への移行」論を考察し、ハイデガー哲学における「歴史的なもの」の重視の積極的意義を明らかにすることを試みる。論述の順序は次の通りである。まず、「別の原初への移行」論の基本構造と問題の所在を確認する。次に、ハイデガーが「別の原初への移行」の試みのもとで論じる「工作機構」の問題を考察する。そして最後に、「別の原初への移行」論は「自己中心性」を高めることに終始してしまうもの

¹ おことわり。本稿は日本現象学会『現象学年報』へ投稿中のものと同一です。

² ハイデガーの著作や講義録については、括弧内に略号と頁数を記し、本文中に引用箇所を示す。GA=*Gesamtausgabe*, Frankfurt am Main: Klostermann.

Martin Heidegger, *Gesamtausgabe*, Bd. 65: *Beiträge zur Philosophie (Vom Ereignis)*(1936–1938), 1989.

か、それともそこから積極的な意義を讀解しうるのかを明らかにする。

1 「別の原初への移行」の基本構造と問題の所在

「別の原初への移行」を検討するにあたって、その基本構造と問題の所在を確認しておきたい。ハイデガーの見るところ、「別の原初への移行」を遂行しようとする今の時代は、第一の原初の歴史に属している。その本質は「工作機構 (Machenschaft)」の支配にある。存在者は工作機構の対象となるのであるが、工作機構の対象となるということは、「脱去する覆蔵 (Sichentziehende verbergen)」という働きをなす「真存在 (Seyn)」が存在者から立ち去ることを意味する。これが「存在に立ち去られてあること (Seinsverlassenheit)」であり、「真存在そのものの第一の歴史」、「第一の原初の歴史」である (GA65, 111)。工作機構そのものはある在り方における「真存在の本質現成」であり、そこでの存在者の経験における真存在との関わりは、「真存在それ自体が脱去する (sich entziehen)」というものであり、「存在者性」や算定可能性がもっぱら特徴的となる。

工作機構は「体験 (Erlebnis)」と共属するのだが、両者は「西洋の思索の主導的問い：すなわち存在者性(存在)と思索(表象-定立的な概念-把握として) (Seiendheit (Sein) und Denken (als vorstellendes Be-greifen))」の定式の一層根源的な把握であるとされる (GA65, 128)。そしてハイデガーは、現代の特徴をなす「工作機構」とは「別の原初」を求めていく。

だが、「工作機構」を契機とする「存在の歴史」構想は問題を孕んでいる。ハイデガーはいわゆる『黒ノート』で、「世界ユダヤ人組織」を「計算的思考」や「あらゆる存在者を存在から根こそぎにする」といった特徴をもつものと描いており、そこにおいてユダヤ人組織と「工作機構」とを同一視している。例えばトラヴニーは、そこでの反ユダヤ主義的な言説は現実のユダヤ人たちの実態に基づかない「現実から乖離」と批判し、また、「ユダヤ人組織」はハイデガーの「存在の歴史」と原初の議論において論じられていることから³、ハイデガーの哲学理論そのものの讀解が問題となっている。そしてアンゲルンは、ハイデガーのような独創的な哲学者になると、問題は、その理論の本質的な部分からイデオロギーへの弱さ、あるいはイデオロギーを生み出す力が生じているのか否かが問題であると指摘する⁴。

³ Peter Trawny, Antisemitismus und Geschichte. Zur Funktion des »Weltjudentums« in Heideggers »Geschichte des Seins«, in Hans-Helmuth Gander und Magnus Streit (hrsg.), *Heideggers Weg in die Moderne. Eine Verortung der »Schwarzen Hefte«*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 2017, 49-70.

⁴ Emil Angehrn, Ursprungsdenken und Modernitätskritik. Seinsgeschichte zwischen Wahrheit und

ハイデガーがいわゆる現実の歴史を見据えて自らの「存在の歴史」という哲学構想を彫琢しようとした際に、反ユダヤ主義的と目される考察を行なっていることは、批判を免れない。「存在の歴史」論がそうした重大な問題を孕んでいることは事実でありそのことは否定されえないが、それでも、「別の原初への移行」の議論を意味あるものと解釈する可能性を探ることはできないだろうか。アンゲルンはハイデガーの「存在の歴史論」を、「存在そのものに目を向けることで人間に他者への視点が開かれる」と述べているが⁵、以下においては、存在そのものへと目を向ける「別の原初への移行」においてはどのような他者との関係が開かれるのかを明らかにしたい。

2 存在の理解の縮減としての「工作機構」

ハイデガーは「工作機構」において、われわれのどのようなあり方を考察しているのだろうか。工作機構とは、存在者を「表象-定立可能なものや表象-定立されたもの」とみなす解釈である。「表象-定立可能である (vor-stellbar)」とは、思念や計算において通路づけられること、そして「制作-定立 (Her-stellung)」や「遂行 (Durchführung)」において前に持ち出せるということの意味する。つまり、工作機構においては存在者は表象定立されたものであり、表象定立されたものだけが存在者的であることになる (GA65, 108f.)。

もちろん、工作機構にも抵抗や限界を設定するよう見えるものはある。だがそれらは、単にさらなる作業のための素材や前進への衝撃、拡張や拡大のための機会になるにすぎず、「表象-定立可能なもの」の他はもはや現れる余地はない。工作機構の支配を揺るがせるようなものは工作機構の内部にはない。「表象-定立的に制作-定立しつつ説明すること」の内部には、確かに不明瞭なことや解明されていないこと、未だ解決されていない諸々の課題がある。これは、工作機構が存在者の存在者性を規定するからであり、工作機構そのものが限界を受け入れうるからではない。工作機構の内部にある「問題」や「困難」は、ただ超克されるためだけにあるにすぎず、「問いに-値するもの (Frag-würdiges)」、つまり「問うことそのものによって尊厳を認められる (gewürdigt werden)」ようなものは何も存在していない。そして、「問いに値すること」を追払い根絶やしにしつつ、問いに値するものを危険がないかたちで、秘密に満ちた、刺激的な、誰にも通路づけられる公共的な「体験」にしてしまう

Ideologie, in Hans-Helmuth Gander und Magnus Streit (Hrsg.), *Heideggers Weg in die Moderne. Eine Verortung der »Schwarzen Hefte«*, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 2017, 95-113.

⁵ Emil Angehrn, *ibid.*, 105.

(GA65, 108f.)。

こうして、「問いに値するもの」である真存在は工作機構においては現れないことになる。存在者を表象定立可能なものと見なす解釈がすべてを制約するなかで、存在者は「現前するもの (Anwesendes)」にとどまる。これが存在者が「存在に立ち去られてあること (Seinsverlassenheit)」である (GA65, 115)。「存在に立ち去られてあること」によって、真存在はそのものとしてではなく存在者から理解され、普遍性と汎通性をもつ「共通のもの (das Gemeine)」として把握される。そうして存在者から真存在が脱去することで、「歴史的に根を奪われること (geschichtliche Entwurzelung)」が起こる (GA65, 116)。

そして「存在に立ち去られてあること」においては、「真存在の本質の、とりわけ真存在の裂け開けの、錯綜し硬直したふさぎの発散」が生じる。具体的には、「多義的なものに対する全く無感覚な状態 (völlige Unempfindlichkeit gegen das Vieldeutige)」や制約されていることをもはや知らないということ、そして、「歴史的な真存在、例えば民族的なものの制約を、そのすべての多義性を含めて無制約的なものへと偶像化すること (Vergötzung der Bedingungen geschichtlichen Seyns, des Völkischen z.B. mit all seiner Vieldeutigkeit, zum Unbedingten)」が生じる (GA65, 117)。

存在者が対象化されることが徹底的に支配するなかで、対象的に現存するものはもはや「表象-定立可能な対象的なもの」ではなく、「質としての量」として露呈するような「巨大なもの (das Riesenhaufe)」にすらなる。量的なものとその表象-定立可能性との根源的な本質は算定可能性であるが、「存在に立ち去られてあること」においては、数が、つまり誰にとっても同じように通路づけられる「算定可能なもの」が肝要になる。こうした表象-定立と存在者の対象化の支配は、ハイデガーの見るところでは「真存在の非-本質」であるのだが、真存在の非-本質の「真存在の本質への本質帰属性」においては認識されないままである。ここでは、「稀なもの、唯一のもの (存在の本質)」に対する最も目立たないが故にもっとも鋭い敵対性が生じている (GA65, 135ff., 122)。

このようにハイデガーが洞察しているのは、工作機構においては「多義的なもの」といった質的差異が消えて一つの数量化された尺度で測られるものに均質化されてしまう事態である。そして、この工作機構の内部で多少の「問題」は生じたとしても、工作機構そのものへの疑義が「問うに-値すること」として問われることはない。つまり、工作機構においては、多様性や外部からの疑義が排除されたかたちでの存在者の支配がなされている。このような存在者は算定可能な説明可能性に制約され、「現存的に現前するもの (vorhandenes

Anwesendes)」として固定されたままになることは (GA65,478)、「工作機構にもとづく無制約性と排他性 (Unbedingtheit und Ausschließlichkeit)」 (GA65, 132) と表現されている。ここにおいては多義的なものは全く認められえず、自らの確実性を脅かす異質なものが全く無力であるので、「自分をもはや呼ばせないという自己確信 (Selbstsicherheit des Sichnichtmehr-rufenlassens)」にまで至ってしまう (GA65, 118)。

というのも、全てのものと全ての工作機構とが全面的に問いにならなくなる、「問いのなさの時代 (Zeitalter der Fraglosigkeit)」にあっては、諸問題が山積していたとしてもそれは「問い」ではない。なぜなら、答えてもすぐ再び問題になるのでそれらの問題は何らの拘束力ももたず、解決は「時間と空間と力の数字の事柄にすぎない (nur Sache der Zahl an Zeit und Raum und Kraft)」ようになってしまうため、解決不可能なものは何もないからである。こうした在り方においては、「決断」のなされる空間が消去されてしまっている。「われわれが誰であり何であるべきか」という前もっての問いなしに、すべてが決定されているところ、つまり、すべてが算出可能なものとみなされ、「自己確実性 (Selbstgewißheit)」が凌駕できなくなるところで、「窮迫の-なさ (Not-losigkeit)」が最高に達する (GA65, 125)。

工作機構においては、存在者の発見と対象化が根拠なき現れにおいて進行し、何ものにも拘束されることはなく、自らを省察し真理を前に「決断」することが奪われてしまっていることを、ハイデガーは問題視している (GA65, 120)。「われわれは誰であり何であるべきか」といった問いが問われることがないので、目標のなさに組織的に目を瞑り、目標のないままに手段のみが存在しているという (GA65, 139)。ここにあっては、「文化」や「世界観」が、もはや何らの目標も欲しない意志にとっての「戦闘技術 (Kampftechnik) の手段」となる。例えば、民族の保存は可能的な目標ではなく、目標設定の条件にすぎないが、条件が無条件的なものになるとき、省慮を断ち切って目標を欲しないことが力をえてくる (GA65, 99)。

「存在に立ち去られてあること」においては、例えば学に民族的-政治的な、あるいは何か他の人間学的な目的設定を割り当てる意味付与や、目標設定を割り当てる「根拠づけ (Grundlegungen)」は不可能であり、そうしたことは単に「存在に立ち去られてあることの固定化 (Verfestigung)」なのである (GA65, 142)。

目標をそれとして決断することなく事態が進行していくさまに対して、ハイデガーは、「別の原初への移行」を模索する。思索の原初的な省慮は、必然的に真正な思索となる。つまり、目標 (Ziel) を設定する思索となるのだが、「われわれの歴史の唯一の、したがって個別の目標」とは「探究それ自体、真存在の探究」である。真存在という根源の力によつての

み、現-存在は、存在に立ち去られてあることの窮迫を、「存在者の回復をもたらすこと (Wiederbringung des Seienden)」としての「創造の必然性 (Notwendigkeit des Schaffens)」へと変容させる (GA65, 17f.)。それでは、存在者の固定化した在り方を変容させる「別の原初への移行」にあつて、「決断」とはどのようなものなのであろうか。それは、「自己中心性」のようなものを高めるだけに終わるものなのであろうか。

3 「別の原初への移行」における「決断」は「自己中心性」を高めるのか

別の原初への移行は、別の原初と第一の原初とが相互に乗り越え合うというかたちでなされる。「第一の原初に根源的に自らを委ねること (Zueignung)」が、「別の元初に足を下ろすこと」である (GA65, 169)。それは、(GA65, 171)「存在者とは何か、存在者性、存在への問い (was ist das Seiende?, Frage nach der Seiendheit, Sein)」である「主導的問い (Leitfrage)」から、「真存在の真理とは何か (was ist die Wahrheit des Seyns)」という「根本的問い (Grundfrage)」への移行においてなされる (GA65, 171)。真存在が「存在者性」として何らか「一般的なもの」、存在者の条件として把握される限り、真存在は存在者の真理に引き下げられ、表象定立の正しさとなってしまう。これに対して、まずは、問うことにおいて真存在のための「場 (Stätte)」を開き明けることが必要となるので (GA65, 95)。そうして真存在の本質現成への「跳躍 (Sprung)」がなされ、「根を奪われることからの救済」が生じる (GA65, 100)。真存在の本質は、真存在のための場を開く「決断の性-起 (Er-eignung der Ent-scheidung)」において本質現成する (GA65, 95)。

真存在の本質現成への「跳躍 (Sprung)」の中で、真理についての決断がなされるのであるが、跳躍とは、性起への聴従的帰属性の備えを開くことであり、その開けは「時-空 (瞬間場所) (Zeit-Raum (Augenblicksstätte))」として、「真存在の裂け開け (Zerklüftung des Seyns)」を現-存在のうちで通路づけ持ち堪えられうるようにすることである (GA65, 235)。そうすることで、現-存在は「性-起の対向躍動 (Gegenschwung der Er-eignung)」の中に突き入り、そうして初めて自己自身になる。真存在は自らを「最も深淵的なもの (das Abgründigste)」として空け透かすのであるが、これは「根拠の欠けている」という経験である。だが、欠けているという仕方での、「根拠」との関わりがここに回復する。「真存在の最高の贈与は拒絶であり、それどころか真存在の原初的な本質現成そのものである」。真存在は「差し向ける拒絶」として、現-存在の性-起であり、そこで真存在の脱去がはじめてそれとして経験されるのである (GA65, 239ff.)。

そして、真存在が人間を「必要とすること (*Brauchen*)」と、人間が真存在に「聴従すること (*Zugehören*)」との対向躍動が、真存在の性起である (GA65, 251)。こうして、現-存在とともに「根拠」との関わりが回復的に獲得されるとともに、存在者を乗り越えることが生じており、現存のものや対象としての存在者から出発する立場が不可能となる (GA65, 171)。例えばアンゲルンは⁶、こうした人間の存在への聴従について、記述的な歴史哲学の路線ではなく、実践的で実存的な要求を明確にしていると指摘する。人間への呼びかけであり、人間が存在の出来事に対して追うべき決断と応答とへの義務を意味している。この義務は個人だけでなく共同体、すなわち民族にも当てはまる。具体的にはある民族、ドイツの民族である。そして、歴史哲学のこの視点は、逆に、主体の正当化と補助的な評価の嵩上げを意味すると批判する。そうした「自己中心性」の高まりが「別の原初への移行」において生じているのだろうか。

ハイデガーによれば、「われわれが誰であり何であるべきかという前もっての問いなしに、すべてが決定されているところ」、つまり、すべてが算出可能なものとみなされ、「自己確実性」が凌駕できなくなるところで、「窮迫の-なさ」が最高に達する (GA65, 125)。そこからの救いを求めて真存在の本質へと起き移すこと、そして、それとともに先行的な問い (真理の本質) を問うことは、存在者のあらゆる対象化や存在者へのあらゆる直接的な接近とは別の事柄である。後者の場合は、人間が総じて忘却されるか、あるいは存在者が確実なものとして「自我」や意識に差し向けられるかであるが、前者の、真存在の本質へと置き移すことにおいては、「人間とは誰か」という問いがはじめて問われてくるのである (GA65, 233)。われわれが人間および「存在者としての存在者」についての恣意的な表象をいきなり根底に据える場合や、代わりに特に「人間」と真存在とを一つにおいて問いに付して、その問いの中に身を持つることをしない場合には、そうした問いは問われることはない。だが、この「人間とは誰か」という問いから初めて、「真存在の真理の本質現成を持ち堪え抜くために真存在に用いられるところの者」という人間の決断がなされるのである。

人間は今や新たに、自分が誰であるのかという問いの前に立つ。真理の本質は根源的に現-存在へと変容した。「現 (自らを覆蔵するための空け透き) の本質現成 (*Wesung des Da (der Lichtung für das Sichverbergen)*)」は、現そのものからのみ規定されうるものであり、現-存在は真存在としての自らを覆蔵することに対して現がもつ空け透かす関連からのみ、基づけに

⁶ Emil Angehrn, *ibid.*, 108.

至ることができる。現-存在は空け透きの本質現成において、気分的に整えられつつ創造的に「担いの実り豊かさ (Ertragsamkeit)」において自らを基づけ、本質現成する。そしてそのようにして初めて、それ自身が人間の根拠となり、人間を基づける者となる (GA65, 329ff.)。このように、前もって解き放たれた「自我表象」ではなく、存在の真理のうちへの聴従的帰属性を引き受けることが、「自分に-至る」ということであり、現への跳入である。人間が「自分のもとに (Bei-sich)」ということにおいて初めて、「他者に対して (Für Andere)」を本当に引き受けるための十分な根拠である (GA65, 320)。

ハイデガーの歴史的思索は「基礎づけ主義と表層的なものの欠如」とが問題として指摘されることがある⁷。だが、存在者という「表層的なもの」に優位をおくか、それとも存在者の根源としての存在に優位をおく「基礎づけ主義」かという二項対立は、ハイデガーの図式に即してはいない。別の原初への移行においては、第一の原初において「問い」となりえなかったもの、真理それ自身が「問い」となる。第一の原初における「アレーティア」としての真理は「非覆蔵性 (Unverborgenheit)」を意味し、非覆蔵的なものそのものを意味する。ここで、覆蔵そのものは「除去されるべきもの」とのみ経験されているため、「覆蔵することそのもの」とその根拠へと問いが向かうことがない (GA65, 349f.)。これに対して、別の原初への移行における真理の基礎づけとは、「非覆蔵性」の引き受けではなく、「自らを覆蔵するための空け透きとしての真理の本質」を経験することである (GA65, 360)。そして、第一の原初と別の原初との「対峙 (Auseinandersetzung)」は「敵対 (Gegenschaft)」ではない。別の原初は、新しい根源性から第一の原初に対してその歴史の真理に至るように助け、したがって外面的ではない最も固有の別様性に至るように助ける。この最も固有の別様性のみが、思索者たちの歴史的対話において実りあるものとなる (GA65, 186f.)。また、別の原初への移行はある「分断 (Scheidung)」を遂行する。真存在の出で来たりと現存在における真存在の真理の基づけとを、存在者のすべての生じ来る働きや認取から分かち。その結果、そもそも「区別づけ (Unterscheidung)」の共通区域は存在しえなくなる。こうして、多義的なものや多様なものの活動空間が「別の原初への移行」において準備されるのである。

おわりに

本稿ではハイデガーにおける「歴史性」の問題の再検討するために、主に『哲学への寄与』

⁷ Vgl. Emil Angehrn, *ibid.*, 110-113.

における「別の原初への移行」論を考察し、そこに積極的な意義を読み取る可能性を探ってきた。

ハイデガーが「別の原初への移行」を模索する中で「工作機構」を問題にしたのは、「工作機構」においては「表象-定立可能なもの」の他はもはや現れえないということ、つまり、自らの算定可能な説明可能性のうちに自閉しており、現に在る事柄に対してわれわれがもはや開かれてはいないということである。

そもそもハイデガーは「始める」ということに関して、「始め (Beginn)」と「原初 (Anfang)」とを峻別する (Vgl. GA39,3) ⁸。「始め」は、始まるや否やすぐに置き去りにされ、出来事が進むうちに消え去るものである。それに対して「原初」は、出来事においてはじめて現れ出て、出来事の終わりにようやくその全貌を現す。現に在るものが何でありかにかにあるのかという「問い」をわれわれが遂行することなく、すべてが算出可能なものであるとあらかじめみなされている事態にあっては、何事も新たに「始め」られることはない。これに対してハイデガーが「別の原初への移行」において模索したのは、過ぎ去った過去があらかじめ規定する閉じた制約を断ち切り (Ent-schließen)、「原初」に宿されている豊かな可能性を反復・反復することで、現に在ることの多義的で実り多い豊かさへと開かれていく道行きである。

例えばハイデガーが『黒ノート』で「工作機構」を「世界ユダヤ人組織」と同一視していることは、反ユダヤ主義との誹りを免れえず、理論上そうした道行きの途上にある躓きであると言えるだろう。だがもう一方で、「別の原初への移行」は、歴史の原初に根ざしつつ、過ぎ去った過去と対峙することで新たな始まりを現在に開く試みとして、積極的な意義を持つと考えられるのではないだろうか。

⁸ M. Heidegger, *Gesamtausgabe, Bd. 39: Hölderlins Hymnen „Germanien“ und „Der Rhein“*, 1980.